

山本周五郎『彦左衛門外記』論

——妄想としての「代弁者」

一 はじめに

山本周五郎が『彦左衛門外記』¹を『労働文化』に連載したのは、昭和三四年（一九五九）六月から昭和三五年（一九六〇）八月にかけてであった。この作品は、五島数馬という青年が身分違いの恋を成就させるため、すっかり隠居生活に身を浸している大伯父、大久保彦左衛門を「天下の御意見番」に仕立て上げてゆく物語である。数馬は彦左衛門の戦記をねつ造し、家康の筆跡を真似た「御墨付」まで偽作。そうして「天下の御意見番」という虚像をつくり出すのだが、その虚像は数馬の想定範囲を大きく超えて躍動し始める。その様子を、「作者」、「筆者」、または「私」と名のる小説家の語り手が、時に作品世界のキャラクターと交流しながら語ってゆくのである。

この作品は連載の予告段階では『大久保彦左衛門』というタイトルになっており、連載開始とともに『大久保彦左衛門実記 御意見番に候』へ、さらに昭和三五年一〇月、講談社より単行本刊

行の際に『彦左衛門外記』へと改題された。山本周五郎はこの作品の連載にあたり、『労働文化』に以下の文章を寄せている。

奈良 沙 紀

私は少年のころから大久保彦左衛門といふ老人が好きで、いつか一度は対面したいと思つてゐた。ところが青年になり、些か文学を読むに及ぶと、史学者や考証家諸氏がござつて、「彼は架空の人物である」と立証してゐるのでおどろいた。そこでとりいそぎ自分でも捜査してみたところ、やはり大久保彦左衛門すなはち、「駿河の隠居」なるなつかしき老人は不在である、といふことを承認せざるを得ない結果となり、私ははなはだこの世をたのみがたないもののように感じたのであつた。以来幾星霜。ふとした機会では私は大久保彦左衛門老が「存在」することを発見し、取る物も取りあへずその住居を訪ねていつた。

史学者や考証家諸氏は捜査を誤つてゐたのである。老は駿河台にはゐない、老の住居は、本所割下水の小さな横丁の奥にあり、訪ねてゆくと若い侍が出て来て、「どうぞ、どうぞ」

と片手を振った。色白でぼちゃつと肥えた軀でまる顔で、ここにこつと笑ふところは、いかにも愛嬌たつぷりで、しかもゆだんなりがたい狡猾さが感じられた。その若侍は私にならつて云つた、「私は彦左衛門の甥で五橋数馬といふ者です、どうぞごべつこんにん」かうして私は老に対面することができたのである。読者諸君、どうぞごべつこんにん。(山本周五郎「めぐりあい」、『労働文化』昭和三四年五月)

連載予告にあたる以上の文章には、「挿話」同様、「私」という語り手が登場しており、この「私」が五島数馬と出会うところから物語の幕が開けることとなる。昭和時代を生きる語り手が、江戸を舞台とする作品世界の人物と交流するという特殊な語りのスタイル。先行研究では語りの問題に関する詳細な論は行われておらず、物語の成立過程を捉えた内容には着目されてきたものの、本文に即した分析はほとんどされていない。本論では特に語りの問題に注目しつつ、物語が成立してゆく上で何が必要となるのか、また、作品執筆の時代背景が作品とどのように呼応しているのかを分析することで、山本周五郎流の大久保彦左衛門物語について考察してゆきたい。

二 『彦左衛門外記』の読まれ方

この作品について先行研究を確認すると、山田宗睦が「この作は、『天下の』意見番」が虚構であることをときあかしたものである。たんに虚構であることをときあかしたのではなく、この虚

構を必要としそれを生みだした若侍の恋物語を結構おかしく描いたところに、興味がある。」と述べている。しかし「天下のご意見番」が虚構であることをときあかしたものと、いう表現には語弊があり、ただしくは奥野健男が後に述べるように、「硬骨の老武士として人気のある有名な大久保彦左衛門という虚像成立のからくりを曝いた小説³」と読むべきであろう。連載予告の周五郎の言葉からもわかるように、「天下の御意見番」としての大久保彦左衛門が虚像であることは史学の側から既に明らかにされており、そうした史学側の「史実」の主張と、講談などで伝わる「虚実」を受け、その「史実」と「虚実」の成立過程を捉えた作品と見るべきである。

また、土岐雄三は『彦左衛門外記』に対して「作者の史実不信感をうかがうことも出来そうだ。」と指摘している。周五郎の「史実不信感」は「歴史と文学」⁵などからも読み取れるもので、彼の作品の根底にある思想ともいえるものだ。歴史を含む物語成立の過程が描かれるこの作品に、あくまで物語にすぎない歴史の姿を冷静に見つめるまなざしがあることを土岐は捉えた。

ただし、土岐は「史実不信感」について本文に即した詳細な分析までは行っておらず、奥平家の内紛についても「話のしめ括りをつける為の段どりにすぎない」と切り捨てている。

土岐の論には他にも疑問点がある。土岐は、彦左衛門が「ある種の催眠術」にかかって「天下の御意見番」となっていたと捉えているが、彦左衛門が数馬の話を信じたわけではなく、数馬の話を利用した、という可能性は全く考慮されていない。これについては奥野健男が「ほんとうに信じたか、旗本の趨勢を逆に利用

したかわからないところが、この小説のおもしろさである」と指摘している。さらに奥野はこの作品を「虚像成立のからくりを曝いた小説」と捉えるだけでなく、物語を生み出す数馬が、小説家の姿と重なることも指摘する。

なにごとくも批判的に見る曲軒周五郎は、彦左衛門伝説を読み聞かすにつれ、その虚名のいんちきさを指摘せずにはいられなくなる。そしてこれは権力からはずされた旗本たちや庶民がでっちあげた伝説に違いない。それならその虚構をつくりあげた直接の下手人、張本人がいるに違いない。(中略) そのうそつきが、今も虚構をでっちあげている小説家の本性に違いないと。(中略) 小説のつくり方を小説にした小説であり、既成史観否定にたつて、物語や伝説の成立の秘密を、ユーモラスに諷刺している。

『彦左衛門外記』が小説家という職業の語り手を持つことを踏まえれば、これは重要な指摘であるといえよう。

木村久邇典の場合は、山本周五郎とごく親しい編集者という立場上、非常に貴重な情報を提示している。『山本周五郎全集』の「附記」において、そもそも『週刊朝日』から大久保彦左衛門を題材に執筆を依頼されたことが『彦左衛門外記』執筆のきっかけになったこと、そして連載開始が延期となったことから『週刊朝日』での連載をやめ、『労働文化』への連載が決まったことなどが明かされている。また、「附記」では「挿話」の誕生経緯についても詳しく触れられており、筆の進まない周五郎が休載を頼ん

だ結果、なんとか「休載の便」だけでも書いてほしいと頼まれて出来上がったのが「挿話」だったようだ。ひととき異彩を放つ「挿話」の誕生経緯はこのように明らかになっているが、先行研究では試みの面白さを指摘されるに留まっており、詳細な分析はされてこなかった。本論では語り手の問題と関連して、「挿話」についても詳細な分析を試みることにする。

三 二つの大久保彦左衛門像

作品の分析に入る前に、『彦左衛門外記』の題材となっている大久保彦左衛門についてみてゆきたい。

大久保彦左衛門といえは、おしもおされもせぬ講談や映画の主人公のひとりである。そこでえがかれた彦左衛門は、旗本きつての頑固できままなすね者であり、人の思惑もかまわぬ横紙破りの隠居じいである。「駿河台の御隠居」といわれたかれは、「天下の御意見番」をもってみずから任じ、天下の一大事とあれば、たらいに乗り、気に入りの魚屋一心太助をしたがえて登城し、老中であろうと將軍であろうと、づけ意見する。若い者相手の唯一のたのしみは、「そもそも鳶の巢文珠山の合戦には、われ十六歳の初陣なし」からはじまり、過去の戦功のかずかずを得意でしゃべることであり、とどのつまり、それにひきかえいまの若い者はとお説教が落ちになる。(略) こうした彦左衛門の傍若無人のわが儘も、講談では、家康の遺言により天下御免の特権を与えられ

たためだということになっている。⁸⁾

以上は昭和三四年（一九五九）六月に刊行された『日本人物史大系』第三巻に収められた「大久保彦左衛門」の章からの引用である。ちょうど『彦左衛門外記』連載の時期と重なるものであり、当時の大久保彦左衛門に対する一般的なイメージを窺うことができる。『彦左衛門外記』における「天下の御意見番」を名乗りだして以降の彦左衛門の様子と、『日本人物史大系』にまとめられた内容は酷似しており、数馬の生み出した「天下の御意見番」が、そのまま執筆当時の「天下の御意見番」像に繋がっていることがわかる。それはつまり、数馬が「講釈師のたねになるくらいがおち」（十二）と述べていることが実現したことになるわけだ。これは史学の側からの上がっていた「天下の御意見番」の「不在」説に対する一つの反抗ともいえよう。「虚実」を「虚実」として切り捨てさせない、山本周五郎の姿勢が見て取れる。

その一方で、講談などの内容をそのまま踏襲するのではなく、周五郎なりの歴史考証が行われている点も興味深い。たとえば初陣の話であるが、『彦左衛門外記』では「そもそも年十六にして遠州乾城に初陣の功名をあげてより、続く天神の役には……」（七の三）とあり、講談でなじみの「鶯の巢文珠山の合戦」とは異なっている。講談の内容は過度に脚色されているため、彦左衛門の父の名や兄弟構成、初陣を含む戦功などに多くの誤りがある。大久保彦左衛門の実際の初陣は『彦左衛門外記』の方が正しく、遠江国乾の戦いであった。彦左衛門とセットで登場することの多い一心太助がこの作品に登場しないのもまた、周五郎による歴史

考証の結果ではないかと推測される。「虚実」をそのまま肯定するのでも、「史実」をそのまま受け入れるのでもない、それらを取捨選択して生み出された作品なのだ。

では、史実の側から見た大久保彦左衛門とはどんな人物だったのか。ここで実在の大久保彦左衛門について簡単に説明しておきたい。

彦左衛門の正式な名は、大久保彦左衛門尉忠教という。大久保家は代々徳川家に仕えた名門であり、彦左衛門は大久保忠員の八男として永禄三年（一五六〇）に生を受けた。戦国の乱世を駆け抜けた人物であり、寛永一六年（一九三九）に死んでいる。

実在の大久保彦左衛門について語るとき、欠かせない史料として『三河物語』があげられる。これは大久保家の子孫にあてた門外不出の「家伝の書」という体裁がとられたものであり、彦左衛門直筆のものが現存している。内容は大久保一族の戦功をあげ、どれほど徳川家に忠義を果たしてきたかということを誇るものであり、同時に戦国威風の消えゆく時代にあつて、譜代への冷遇に対する不満と嘆きが表わされたものでもある。

周五郎のいう「史学者や考証家諸氏」は、大久保彦左衛門という人物を「淋しい諦めの潜んでゐる」、「不平の中に彼は寛永十六年（一九三九）八十才で死んだ」¹⁰⁾、「古いものを克服しながら成立していった幕藩体制から、その古さのゆえに疎外された悲劇の人物のひとりであった。」¹¹⁾というように評していた。乱世を駆け抜け、泰平の時代に馴染むことのできなかつた戦国武士。彼は変わりゆく時代に諦めを覚え、諦念と悲憤のうちに死んでいった哀れな人物、ということになっている。

こうした史学における大久保彦左衛門のイメージは、『彦左衛門外記』の作品前半に反映されているといえよう。朝顔と菊を育てることを生きがいとする老人、彦左衛門。それが数馬により、講談の種となるような人物へと変貌していく様子が描き出されるのである。

また、ここで大久保彦左衛門は決して高い地位にある人物ではない、ということを確認しておきたい。彦左衛門が講談で人気を博した一因には、彼が権力から外れた立場から政府の中核へと切り込む爽快さがある。百瀬明治は彦左衛門人気について、以下のように述べている。

江戸時代の人びとにとつて、將軍は手の届かない絶対的な存在であつたから、その將軍に直言してへこまずといふのは、実にスカツとするひとつの夢であつた。江戸時代人は、そんな痛快な御意見番の役割を代行して自分たちのうつつぶんをはらしてくれる人物として、お上の權威にも敢然とたてつく彦左衛門を發見し、どんどん虚像のイメージをふくらませていったのだ、と言つてよい。(中略) 近世封建社会・江戸時代の庶民たちのあいだで生みだされた人気者の一人なのである。

つまり、厳しい封建制の時代が「天下の御意見番」を求めさせたのであり、権力に抑圧されていた人びとにとつてのヒーローとして大久保彦左衛門は語られてきたということになる。

時代の変化に取り残された悲劇的人物としての大久保彦左衛門

と、庶民の代弁者として活躍するヒーロー、「天下の御意見番」としての大久保彦左衛門。この二つの異なる大久保彦左衛門像の前に、周五郎は『彦左衛門外記』をどちらの要素も取り入れつつ、どちらの大久保彦左衛門もそのまま受け入れない、周五郎流の大久保彦左衛門の物語を描き出していったのである。

四 「事実」と「史実」／「しんじつ」と「真実」

『彦左衛門外記』では、注意深く使い分けられている言葉が存在する。一つが「事実」と「史実」という言葉、そしてもう一つが、「しんじつ」と「真実」という言葉である。

まず「事実」という言葉についてだが、これはたとえば以下のように用いられている。

大伯父の彦左衛門は、少年時代から戦塵の中に育つた。これは紛れもない事実で、戦場生き残りの老人たちで知らない者はない。残念なのは大伯父の口述した戦歴が、かんばしくないことである。(三〇の一)

この部分から、「事実」という言葉は「紛れもない」出来事として捉えられていることが確認できる。「この世におこなわれた事で、帳消しになるようなものは絶対でない」(五の四)という彦左衛門の言葉があるが、これが「事実」というものの性質と説明することができるだろう。

次に、「史実」について見てゆくために、大久保彦左衛門と水

野十郎左御門の歴史に関する問答の場面を確認したい。

「東照公のたぐい稀な辛抱よさと、譜代の家臣たちの不屈な努力とで、徳川家はいかに天下を取り、征夷大將軍も家光公で三代になった、——だからこそ、負けいくさが勝ちいくさといわれ、臆病者が豪傑といわれ、ありもせぬ戦場の功名ばなしがそのまま信じられるのだ」

「それでは青史を誤るではありませんか」

彦左衛門は振向いて、なにか珍しい生き物でもみつけたように、まじまじと十郎左御門の顔を眺めた。

「おまえは」と老人は審かしそうに訊き返した、「おまえは、史記などに書いてあることを信用するか」

「もちろんです、史書があり伝記があればこそ、人は祖先を知り家系を知ることができる、いかなる人びとが、いつでもどこで、どのようなことをし、それを誰がどのように受け継いだか、こういう正しい史実を確かめることが、私のこんにちあることを証明するではありませんか」(二三の三)

彦左衛門の言葉には、過去を語る力を有した者、たとえば時の権力者などによって「史記」がつくられ、「史実」が語られることが示されている。つまり、「史実」とは「事実」と一致するとは限らない、あくまで物語の一つにすぎないことが読み取れる。

しかし水野はそうした「史実」の性質に気づかず、それを妄信している。そのあまりに素直な性質が後に数馬によって散々利用されることとなるのであるが、ここでは水野の「史実」観の中に、

水野自身が気づいていないある限界が表れていることに注目したい。

水野は「史記」というものが、「祖先」や「家系」、「誰がどのように受け継いだか」といったことを知るために重要なものだと考えている。そこには「史実」が「私のこんにちあること」を「証明」するものだという認識があり、そのため彼は現在の在りようを裏付ける絶対的なものとして「史実」への信頼を有しているのである。しかし「史実」が「こんにち」の人間が「こんにち」の裏付けのために必要とするものであるということは、過去に実際に起きた「事実」であるかどうかを問うものではない、ということをも示しているのであるが、その点に水野は気づいていない。「史実」は「こんにち」の人間によって「こんにち」のために語られるものであるから、そこに語る者の意志が介在しているのは当然のことだ。「史実」とは語り手によって都合よく変えられてしまう可変的な性質を持っており、常に信頼に足るような絶対的なものではないのである。

また、「史実」の不確かさという問題は、奥平家の騒動とも関連してくる。先に述べたように、「史実」とは「祖先」、「家系」、「誰がどのように受け継いだか」という内容を伝え、「こんにち」を裏付けるものだ。その理論をあてはめれば、奥平家の「家系」の問題はすなわち、「史実」の問題であると言い換えられる。奥平家の内部で起こっていた、若君、姫君の誘拐事件。首謀者たちの狙いは、本家と分家の子どもを頻繁に入れ替えることで、あわよくば自分たちの息子を本家の跡取りに据えようとするものであった。なんとも間の抜けた騒動であるが、「事がまざらわしく

なれば、人はうんざりして深い詮索はしなくなるもんだから」(一の五) という首謀者の台詞を、簡単に笑い飛ばすことはできない。

彼らの狙いは、「家系」の混乱である。突拍子もない発想ではあるが、この奥平家、「家系」の把握は実際にかなり曖昧であった。ちづか姫には「伯父」、「姪」といった概念がなく、誘拐事件も誰一人として気づいてはいない。誘拐されている当人たちさえ深く考えることはなく、数馬が気がつかなければそのまま誘拐劇は続いていただろう。流石に跡取りを間違えるような事態は起こり得ないだろうが、それも若干怪しんでしまうような状態である。このような「家系」の混乱、すなわち「史実」の混乱を狙った行動は、数馬による「天下の御意見番」創出の発想と根を同じくしているのである。

土岐雄三が奥平家の騒動について「話のしめ括りをつける為の段どりにすぎない」と説明していることはすでに紹介した。だが、「史実」という物語の性質が利用されている点を見れば、奥平家の騒動を単なる「段どり」として片付けることはできない。

さて、次に「しんじつ」と「真実」の使い分けをみてゆくこととする。「しんじつ」と「真実」が注意深く、ある法則をもって使い分けられていることは、以下の引用部分によく表れている。

「おまえは作り話が聞きたいか」と初めに大伯父は云った、
「それともしんじつ」のことが聞きたいか」

もちろん真実を聞きたい、と彼は答えた。大伯父はさらに念を押した。

(中略)

そしてその「てっぺんしんじつ」を話してくれたのだから、それが真実の戦歴であることには間違いがないであろう。だが、そういう戦歴が真実であるなら、作り話ではなくとも、せめて「中ぐらいの」ほうにしておけばよかった、と彼は後悔したものであった。(一の二)

まず「しんじつ」について分析するため、水野と彦左衛門の歴史に関する問答の中の、「おまえがそう思うなら」と老人は刀を見つめたままで云った、「それはおまえにとつてしんじつだろう、自分でこれがよしと信じたら、他人の意見など聞くことはない」(三の三) という言葉に注目したい。この部分から、「しんじつ」という言葉は、「事実」であるか否かとは関係ない、「自分がこれよしと信じた」ものを指していることがわかる。

たとえば水野の「史実」が信用に値するという考えや、彦左衛門にとつての負け戦だらけの戦歴などが「しんじつ」に相当する。「事実」であってもなくても、例えば他の証言と矛盾したとしても、それが本人の「信じた」ことであれば、本人にとつての「しんじつ」となるのである。そこには「事実」とも似た、揺らぎのない絶対的な性質が見出される。

それに対して「真実」は、本人だけに限定されない、より客観的な意味合いをもって用いられている。

「酒井、本多、榊原、井伊、水野、土井、藤堂ら諸侯に当つて、各家に伝わるしんじつの記録をしらべたんです」数馬は

自分のふところを叩いた、「これら諸侯の記録は、単独では信じられないかもしれない、だが相互につき合わせて異同を検討すれば、動かすことのできない真実があらわれるものです、私はいまこそ、あなたの化けの皮をはいでやる、あなたにも少し少ななりとも勇気があるならお聞きなさい」(五の二)

「真実」はほかの人間とも共有されるもの、つまり、大多数の人間に支持されるものを意味する。しかしその本質は、所詮「しんじつ」の総和に過ぎない。物語を集めて検証した「真実」が、「事実」と一致するかというと、また別の話なのだ。しかし「真実」とされるものは、客観性という付加価値があるため、多くの人間から信頼を獲得することになっているのである。

これらをまとめると、「史実」と「事実」、「真実」と「事実」は全く別物だというのに、その点が認識され難く、「史実」と「真実」への根拠のない信頼が蔓延っていることになる。所詮、「史実」も「真実」も語り手の意志が介在する物語でしかない。そしてそれらが物語であるということ把握し、物語でしかない「史実」、「真実」への妄信を利用することで、数馬は「天下の御意見番」という虚像を成立させてゆくのである。数馬は家康の「御墨付」まで偽作し、周囲にあたかも「天下の御意見番」という虚像が「事実」であるかのように誤認させた。こうしてまんまと青年たちは騙されていったわけだが、彦左衛門が「天下の御意見番」という虚像を受け入れたところから事態は数馬の予想の範疇を遙かに超えてゆく。彦左衛門が江戸城に乗り込み、秀忠の副署を得たのである。この瞬間、二代將軍に公認されたという「事実」を

成立させ、彦左衛門は「天下の御意見番」という非常識な権力を実現させてしまったのだ。

これは彦左衛門の企みと読むべきだろう。彦左衛門は数馬の話信じ、自らを「天下の御意見番」と思い込んだのではなく、「天下の御意見番」という数馬の「作り話」(一の二)を、旗本の現状を憂う心から、最大限に活用することに決めたのである。彦左衛門は「真実」と「しんじつ」の違いを、そして「史実」と「事実」の違いをはつきりと心得ている。いくら数馬の語りがうまくとも、数馬の語りを「事実」と誤認したりはしないだろう。また、十二章での数馬との会話をみても、彦左衛門が数馬の話信じこんでいないことは明らかである。彦左衛門もまた、数馬同様「くわせ者」(十一の五)なのである。

このように『彦左衛門外記』における注意深い言葉の使い分けをみていくと、「真実」や「史実」の正体が物語であること、それ故に全幅の信頼に値するものでないことが読み取れる。そして、その物語を妄信する者と、それを利用する者とが描き出されているのだ。

ここで一つ注意しなければならないことがある。このように利用し、利用される関係と説明すると、物語の語り手には絶対的な支配力が備わっているかのように思われるが、実際はそうではない。確かに語り手には物語を進行させる強大な権力があるが、この作品の特徴として、その権力が時として全く役に立たない点にも注目しなければならない。以下の章では、『彦左衛門外記』における語りについて分析することで、この作品における語りという行為がどのような性質をもっているのか、また、語り手とその

他の人間の関係性についても考察してゆきたい。

五 語りの諸相

『彦左衛門外記』における語りという行為は、数馬が野望を達成するうえで欠かせない要素である。

そもそも数馬は剣の腕の立つ青年として登場している。その腕で出世を考えると剣に自信を持っていた数馬だが、彼がその腕前を披露する場面は、実は冒頭だけだ。五島数馬最大の武器は剣ではなく、言葉なのである。彦左衛門を言いくるめようとする中で、彼の「血が活き活きと動き出し」、「いま初めて人間らしく眼ざめ」たように感じるほど、「充実感」に満たされていた。(五の二)「天下の御意見番」を創出する中で、数馬は語りの力に目覚めていったのである。

こうして数馬は語りの力によって「天下の御意見番」を仕立てあげ、不良少年たちを意のままに操り、奥平家でも言葉による戦いを繰り広げてゆく。数馬にとって、言葉は最大の武器、語りは戦闘ともいえる行為なのだ。そう考えてゆくと、奥平家で一時的に言葉を操れなくなる事態は、数馬にとって最大の武器の喪失を意味することになる。

数馬以外にも、この作品には語りの欲求を抱く人物が多々登場しているが、すべての語りに数馬のような力があるわけではない。数馬の語りがなぜ強力な「武器」となりうるのか。それは数馬には語りを聞く側への意識と配慮が存在するからである。

彦左衛門は当初、数馬のいう「真実」を否定していたが、次第

に彼の語りに引き込まれている。虚構の物語と知りながらも、語りを聞く欲求に逆らうことができなくなるのだ。その理由をひと言でいえば、数馬の語りが「面白い」からであろう。数馬の語りは、語り手の欲求を満たすための一方的なものではない。聞き手の欲求を満たす語りであって、たとえば不良少年たちは、彼らの望む大久保彦左衛門像を数馬に提示されたことで、その語りの力に飲み込まれていった。聞き手の欲求を満たすことのできない語りは「念仏」でしかないが、語り手が聞き手の欲求を満たす時、語りをはじめて聞き手を動かす力を発揮する。このように『彦左衛門外記』では、物語の成立において聞き手の意志が無関係ではないことが示されているのである。語り手は聞き手を必要とし、聞き手に語りを聞かせるために、聞き手の欲求を満たさねばならない。これが『彦左衛門外記』における語りという行為の特徴だといえよう。

ではそのような語りの性質を踏まえて『彦左衛門外記』の語り手を見てゆくと、どのようなことが明らかになるだろうか。

まずこの語り手の特徴として、基本的に「作者」もしくは「筆者」と名乗っており、物語の進行役としての強い自覚を持って登場していることがあげられる。(一の四までは「筆者」とかかれ、それ以降は「作者」となっている。)たびたび「読者」に語りかけ、登場人物の一人であるかのように存在感を放つ語り手だが、「挿話」では完全に登場人物の一人と化し、作中人物と交流してみせることは注目すべきだ。このとき、語り手は連載予告同様、「私」と名のり、本編とは区別されている。

次に本編での立ち位置を見てゆくと、この語り手は、ときに

ポーターのように物語の現場に降り立ってみせることがある。

読者諸君、ちよつとあちらへゆきましよう、これからの二人の会話は退屈ですからね、その会話は二人だけには胸のときめくほど意味深いものだろうが、われわれ第三者にとつては、単に退屈なだけでなく、ばかばかしくって欠伸も出ないというものですから。——えいくそ、蚊がぐやあがった。失礼。さてどうやら終わったようですね、数馬と姫がこつちへやつて来ます、(二一の六)

この語り手は、昭和三四年という時代を生きているが、度々作品中の世界に立つては、作中人物の動向をみつめるような語りをする。そしてここでは「読者諸君」と呼ばれる者たち——無論、実際の『彦左衛門外記』の読者のことではない——と会話をし、彼らを作品の中で誘導して見せている。つまり、この物語の登場人物は「作者」という語り手のほかに、「読者」という聞き手の存在が含まれているのである。

次に「挿話」についてだが、ここでは「作者」である「私」が作中人物と対面し、会話をし、ゆくりの様子を描かれる。この間、「私」は「私」の視点で、「私」の立場から作品世界を見、作中人物の内面に踏み込むことはなく、「作者」として本編の進行を行うこともない。というよりも、「私」は「私」の立場からしか作品世界を見ることができない状態になっており、語り手としての権限を本編と比べて大幅に制限されている。

「挿話」の成立過程は木村が明らかにしているように、もともと

と本編の代わりに書かれた部分で、飛ばして読んでも本編の把握にはとくに支障はない。しかし、この「挿話」は物語の作り手の立場を明瞭に示しており、それは『彦左衛門外記』の本編とも決して無関係ではないのである。

「挿話」において、「私」は登場人物たちの協力を得られず、物語の進行を行えなくなっている。「挿話」における語り手「私」の立場は非常に弱く、それゆえ必死に登場人物たちに働きかける。

「それに第一、私がつもりになれば、あなたなんぞすぐ消してしまふことができますよ」

「まあ失礼な、このわたくしを消すことができますですって」
「簡単にごくです、産褥熱で死ぬとか、歩いていて堀へ落ちて死ぬとか、ふだんの吝嗇の祟りで栄養失調のため死ぬとか、意地悪をすれば原因不明の病死で頓死するとかね、ええ、私の筆の持つてゆきようでいつだって消してごらんにいれますよ」(挿話)

このように、「私」は登場人物に対して、「作者」としての権力、物語の方向性を決める力をも振りかざして見せた。ここには語り手の絶対的な支配力が示されているわけだが、それにもかかわらず、千貝は全く言うことを聞いてはくれない。

途方に暮れた語り手は、彼ら全員との「絶交」を考え始める。語る行為自体をやめるということは、物語の進行の停止、もしくは終了を意味しており、ここでも「私」は権力を行使しようとしたわけだ。しかし、やはり作中人物たちは一向に姿を見せてはく

れない。そして「作者」の惨めさを噛み締めながら、「私」は再び数馬を探しに出てゆくことになるのである。このように描かれる「私」の無力さは、語り行うためには、語り手、聞き手に加えて、語られる対象も必要だということを示すことになっている。

『彦左衛門外記』における語り手は万能ではない。物語を語り始めた、すなわち生み出した者でありながら、その生み出したものたちを完全に制御することができなくなっている。これは作り手でありながら、「天下の御意見番」の暴走を止めることができなくなつてゆく数馬にも通じることである。

また、語る側は語られる側を一方的に支配しているのではなく、語られる側が語られることを許容して、はじめて語りが成立していることがここには描かれている。ここに一種の共犯関係があり、この点においても、「作者」と登場人物の関係は数馬と彦左衛門の関係と共通している。

このように、数馬と、そしてこの作品の語り手を見てゆくと、語りという行為の強力が描かれていることを確認できると同時に、物語のつくり手が語り手一人ではないことも表わされているといえる。語られる対象や、それを聞くもの（この作品では書かれた「この物語」を通して出会う「読者」）が必要であり、語り手一人によって成立する物語などないのだ。それは小説などの物語にも当てはまると同時に、歴史という物語にも当然当てはまる。「虚実」であろうと「史実」であろうと、それを語る者と語られる者、そして語りを聞く者と三者が必ず存在し、その三者の合意によって初めて物語は成立するのだ。たとえば権力とは程遠い場所に生きる一般庶民であろうとも、歴史という物語を成

立させる権力と責任が存在することになる。ここに、山本周五郎の歴史観の一端を認めることができるといえる。

六 妄想としての「代弁者」

先に紹介したように、山本周五郎は出版社からの依頼で大久保彦左衛門を題材にした作品執筆に臨んだ。そもそもなぜ大久保彦左衛門を題材に依頼されたのか。明確な理由は不明だが、百瀬明治によれば、この時代に「ちよつとした彦左衛門ブームが生じた」というのである。出版社の側も、そうした「ブーム」に後押しされた部分があったのではないかと考えられる。

「彦左衛門ブーム」について、百瀬はさらに以下のように述べている。

ところで、『彦左衛門外記』は昭和三十四年六月からよく十五年八月まで雑誌「労働文化」に連載された作品だが、この前後の時期を見まわすと、興味深い現象が起こっている。

それは、彦左衛門関連の映画が相次いで制作され、朝日新聞では村上元三の『大久保彦左衛門』の連載（昭和三十五年二月）三十六年三月）がはじまったというふうには、ちよつとした彦左衛門ブームが生じたということだ。¹⁴⁾

第三章で紹介したように、封建制時代、抑圧された人びとの「意見」を代弁するヒーローとして「天下の御意見番」が求められたのだとすれば、なぜ昭和三〇年時代に「天下の御意見番」が多く

取り上げられたのだろうか。

その疑問について考察するために、『彦左衛門外記』が執筆された時代状況を確認してゆきたい。

『彦左衛門外記』が執筆されたのは昭和三四年から三五年。政治運営は自由民主党政権によって行われており、首相は岸信介であった。時代はちょうど安保闘争が激化の一途をたどってゆく最中である。

中村隆英の『昭和史』¹⁵⁾によれば、安保闘争を「予告」する動きとして、昭和三三年（一九五八）一〇月の警察官職務法の改正問題があるという。この改正案は警察官の権限を強めるもので、日米安全保障条約調印に対する反対を押し切ろうという狙いがあった。警察の権限を強め、市民の活動を抑圧しようとする法案は、戦前の治安維持法を思い起こさせる。それに対して社会党や日本労働組合総評議会を先頭に、「デートもできない警職法」をスローガンとする反対闘争が巻き起こった。

ここに、国民の声を無視した為政者中心の政府姿勢に対し、封建時代の抑圧にも似た圧迫感を覚える民衆がいたことがみてとれる。その圧迫感の中、政府の中核まで果敢に乗り込む「代弁者」に、痛快な気持ちを抱くことは頷けよう。このように封建時代と同様の理由で、「天下の御意見番」たる大久保彦左衛門を好む風潮が生まれていたと考えられる。

それに対して、周五郎は、人びとの期待する「天下の御意見番」大久保彦左衛門像を清々しいほどに裏切つてみせた。迷惑極まりないこの老人は、数馬の私利私欲のために利用されているに過ぎない。打ち出す「御意見」も数馬の頭痛の種になるのがせいぜい

であり、「代弁者」としての活躍は一切見せないのである。権力者に切り込み、正義を貫くヒーローの存在など幻想でしかないことを、周五郎流の大久保彦左衛門は証明してみせたのである。

ただ、この時代には、安保闘争以外にも多くの大衆運動が起こっていたことを見落としてはならない。『昭和史』で中村隆英は、「安保闘争は時代を象徴する事件であったが、たんに安保闘争だけが特別な事件だったとみることはできない。この時期においては、労働組合および市民運動の形で、反政府闘争が次々に展開された。」と述べている。このように、超越的な「代弁者」に頼るのではなく、自ら声を上げる動きが活発化していたのである。そうした社会の動きが、物語というものが特権的な語り手に一方的に支配されるものでなく、語られる者やその語りを受容する者にもまた、つくり手としての力と責任があることを『彦左衛門外記』に描き出させた部分があるのではないだろうか。

『彦左衛門外記』は『労働文化』という雑誌に連載された。「労働文化」は労働文化社によって発行されており、発刊の辞には「楽しく働き愉快地に生活できる途々を求めて、現在の日本を鋭く批判し、世界情勢に耳を傾け、共に泣き共に笑ひながら、生産を基調として日本民主化への前進を促進せんと念願する」とある。

『労働文化』への連載は、他社との不調和から生まれたことではあるが、「労働者」を対象に据えるこの雑誌に、一部の権力者が生み出す「史実」への不信心、そして一人のヒーローに「代弁者」としての希望を託す愚かさを提示したことには留意すべきであろう。大衆運動の活発化の最中の連載である、「代弁者」という幻想を碎いたこの作品が、『労働文化』の読者層から共感を得るこ

とは期待ができたのではないだろうか。

ただし、山本周五郎は当時の大衆運動、とりわけ安保闘争について全面的に肯定していたとは言い難い。安保闘争やそれに連なる学生の運動に対して周五郎が懸念と不信感を抱いていたことは、『彦左衛門外記』とほぼ同じ時期に執筆された『天地静大』^⑦からも読み取れる問題だ。『天地静大』では幕末の動乱の中で、青年たちによる暴走気味の政治運動の様子が描写されている。『彦左衛門外記』の場合も、水野ら不良少年たちの血気盛んな姿が描かれており、これらは安保闘争における学生の活動を想起させよう。

水野らがいとも容易く数馬に騙され、操られる様子は滑稽で、笑いを誘うものがある。だが、その滑稽さには、どこか笑い飛ばせない、ぞっとするものがありはしないかだろうか。数馬の存在は、代弁者というヒーローが存在しえないにも関わらず、「しんじつ」を統括し、時にはそれを踏みじり、「真実」と称した語りをを行う支配者が存在しうることを表している。

水野を含む不良少年たちは、「みな純真でひたむきで、愛すべき性質の少年たち」(三の五)だ。武装して彦左衛門の屋敷に集まった不良少年たちは、「それぞれが自分ひとりでの世界を背負っているような、極度にふくれあがった自負心」(十一の一)を抱えている。彼らは「純真でひたむき」であるがゆえに、自らが「代弁者」になれると信じているのである。そして、「代弁者」に希望を委ねる愚かさ、代弁者」に自らがなれると勘違いをする愚かさは、「代弁者」などという妄想を信じている点でなんら変わりはない。このような単純な思考に閉じこもっている不良

少年たちは、それゆえに数馬にいいように操られることになるのである。

つまり、「代弁者」に希望を委ねるのではなく、個人がそれぞれ「意見」を叫べる健全性への共感と、「代弁者」という妄想に相変わらず囚われ、無意識に他人の物語に支配され続ける危険性への懸念が『彦左衛門外記』にはない交ぜになって描き出されているといえる。

実際の水野十郎左衛門は、幕府への反骨心を露わにしたことにより、その命を落とした。その点をふまえてみても、『彦左衛門外記』における水野ら不良少年たちの滑稽なまでの純真さは、重みを持つて受け止められるべきである。

以上のように、語り手、聞き手、語られる対象という三者によって物語が成立することが描かれ、また、執筆当時の社会情勢が映しこまれた『彦左衛門外記』という作品には、優れた諧謔性、滑稽さとともに、歴史を含む物語への認識と、社会情勢への深い洞察が表れていることを指摘できる。それと同時に、こうした要素を含みながらも、『彦左衛門外記』において「なつかしい老人」、大久保彦左衛門の「発見」が行われていることも最後に改めて指摘しておく。

『彦左衛門外記』は講談で語られるようなヒーローとしての「天下の御意見番」がいかに幻想でしかないかを見つめつつ、史学の側が評してきた悲劇的人物という評価の中から、「なつかしい老人」たる大久保彦左衛門の「存在」を掘り上げてみせたのだ。

先に述べたように、「しんじつ」は「事実」と異なるものであ

りながら、「事実」のように揺らぎないものとして描かれている。それぞれの信じるもの、つまりは一人一人が語り手となる物語に對して「しんじつ」という言葉が使われているのであり、それらは他人と共有されることも「真実」として認められる必要もない。あくまでも個人の物語として、「しんじつ」は自由に存在する。

生みの親である数馬にも思い通りにならない「天下の御意見番」。彼は誰の希望や声を届けるわけでもなく、思うままに突き進む。ヒーローでも悲劇の人物でもない、これこそが山本周五郎の見出した、大久保彦左衛門の「しんじつ」の物語なのである。

注

(1) この論における本文の引用は、すべて山本周五郎著、『彦左衛門外記』（『山本周五郎小説全集』第二二卷 昭和四四年九月、新潮社）を用いた。なお、引用部分における傍線は全て論者によるものである。

(2) 山田宗陸「解説」（『山本周五郎全集』第一三卷 昭和三九年七月、講談社）

(3) 奥野健男「解説」（『彦左衛門外記』昭和五六年八月、新潮社）

(4) 土岐雄三「解説」（『山本周五郎小説全集』第二二卷 昭和四四年九月、新潮社）

(5) 「歴史と文学」は『中央評論』（昭和三六年六月）に掲載されたもので、本論では「歴史と文学」（木村久邇典編『完本 山本周五郎全エッセイ（増補版）』昭和五五年二月、

中央大学出版部）より引用した。この「歴史と文学」の中で、周五郎は以下のように歴史について述べる。

歴史というものは、概括して、そのときの政治のかたち、ないしはそのときに政治を左右する権力のあり方によって、修正されたり、改ざんされたり、ある場合には抹殺されたり、ねつ造されたりするものと思います。

（中略）

歴史が政治と言うものにカラまる場合には、いつでもこういうふうな、真実そのものよりも、そのときの社会情勢の变革をうらづけたり、正当づけたりするために修正され、改ざんされ、抹殺されねつ造されるといった具合であつて、これが、歴史というものの弱点でしょうか、強いところでしょうか、——そういうものを本来的にもっていると思うのであります。

(6) 奥野健男、前掲論文。以下で引用する奥野の論も、すべて同じ論文からの引用である。

(7) 木村久邇典「附記」（『山本周五郎全集』第一三卷 昭和五八年三月、新潮社）

(8) 北島正元『日本人物史大系』第三卷（昭和三四年六月、朝倉書店）

(9) 雄山閣編輯局『異説日本史』第六卷（昭和六年、雄山閣）

(10) 高柳光壽「大久保彦左衛門」（『日本歴史』第六〇号 二八年五月）

- (11) 北島正元『日本人物史大系』第三卷（三四年六月、朝倉書店）
- (12) 百瀬明治『怪傑！大久保彦左衛門』（平成二二年一二月、集英社）
- (13) 百瀬明治、前掲書。
- (14) 百瀬明治、前掲書。
- (15) 中村隆英『昭和史』下巻（平成二四年八月、東洋経済新報社）
- (16) 『労働文化』（昭和二二年八月、労働文化社）
- (17) 『天地静大』は昭和三四年（一九五九）一二月から昭和三年（一九六〇）一〇月まで『北海道新聞』、『中日新聞』、『西日本新聞』の三紙で連載された作品。

（ならさき） 大学院前期課程在學生